



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

養護実習における学生と養護教諭の学びの検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-06-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹鼻,ゆかり, 朝倉,隆司, 渡邊,正樹, 佐見,由紀子, 五十嵐,由美, 塚越,潤, 丸田,文子, 五十嵐,靖子, 遠藤,真紀子, 大関,智子, 小熊,三重子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/107970

養護実習における学生と養護教諭の学びの検討

竹鼻 ゆかり*・朝倉 隆司*・渡邊 正樹*・佐見 由紀子**
五十嵐 由美**・塚越 潤**・丸田 文子**・五十嵐 靖子**
遠藤 真紀子**・大関 智子**・小熊 三重子***・小野 優佳**
酒井 順子**・佐藤 牧子**・高橋 衣純**・中谷 千恵子**

養護教育講座

(2010年6月30日受理)

TAKEHANA, Y., ASAKURA, T., WATANABE, M., SAMI, Y., IGARASHI, Y., TSUKAKOSHI, M., MARUTA, A., IGARASHI, Y., ENDO, M., OOZEKI, T., OGUMA, M., ONO, Y., SAKAI, J., SATO, M., TAKAHASHI, I. and NAKATANI, C.: Learning of University Students and Yogo Teachers during Yogo Practical Training. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 62: 55-61. (2010) ISSN 1880-4349

Abstract

This study was undertaken to clarify the learning contents that university students and Yogo teachers acquired before and after Yogo practical training.

Subjects of questionnaire surveys performed for this study were 11 university students belonging to a Yogo teacher training course at a university that provided Yogo practical training, and four Yogo teachers at a school, attached to a university, which provided practical training. Before the surveys, we explained the purpose and design of the study and obtained their consent to participate.

After practical training, we surveyed students for their free descriptive responses about what they had learned through the practical training. We elicited their requests. We also conducted a survey of Yogo teachers after practical training to elicit their requests for the university and to elicit their free descriptions and opinions related to what students and Yogo teachers had learned.

Through the Yogo practical training, Yogo teachers in the school were able to explain their everyday responses and to recognize the specialized nature of Yogo teachers anew. They showed eagerness for new practical training. Students obtained guiding principles for future university life and their choice of course. Results of the study suggest the following necessities for the future: review of university curriculum and deepening cooperation between teachers on the training side and the school.

Key words: Yogo Practical Training, Yogo teacher, University Student

Department of School Health Care and Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究では、養護実習の事前から事後にかけて学生と養護教諭が習得した学びの内容を明らかにすることを目的とした。

* 東京学芸大学 芸術スポーツ科学系 養護教育講座 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)
** 東京学芸大学附属学校研究会 学校保健部会
*** お茶の水女子大学附属幼稚園

対象は、養護実習に参加した大学の養護教諭養成課程に所属する3年生11名と、実習を担当する附属学校の養護教諭4名である。

学生には、実習後に、実習を通じて学んだこと、要望などに関して自由記述による調査を行った。養護教諭には、実習後に、学生ならびに養護教諭自身が学んだこと、大学への要望等について自由記述等による調査を行った。調査にあたっては、研究の趣旨を説明し、同意を得たうえで行った。

養護実習を通して、受け入れ校の養護教諭は、自己の日頃の対応を見つめ直し、養護教諭の専門性を再認識し、新たな実践への意欲をもつことができていた。学生は、今後の大学生活や進路選択への指針を得ていた。今後は、大学のカリキュラムの見直しと、養成側と受け入れ校の教員同士の連携を深める必要性が示された。

1. はじめに

日本教育大学協会全国養護教諭部門研究委員会が提案した養護教諭のモデル・コア・カリキュラムにおける養護実習を含む「臨地実習」の目標は「学校教育の場で子どもと直接かかわり、養護実践について学び必要な技術・態度を修得する。また大学で学んだ理論を臨地で実証し研究するとともに、研究して得られた成果を一般化する実践と研究の相互関連を学ぶ。さらに自らの適性をはかり、教育専門職としての自覚を深め、資質の向上をはかる。」となっている¹⁾。大学等の養成機関においても養護実習は、養護教諭の相談的対応場面を観察したり、学校という現場を実際に体感したり、子どもの心のサインや観察のポイントを知ったりなど、学生が様々な形で実際に子どもと接する体験学習の場であると捉えている²⁾。つまり学生にとって養護実習は、学習と経験とが融合する貴重な学びの機会であり、自らの資質の向上を図る場であるといえる。さらに実習を通じ学生は、自らの力量不足を自覚し、学ぶことの重要性を再認識し、その後の自分の学びを深め研究的姿勢を持つことも期待される。しかしながら、養護実習に関しては、明確な教育目標や具体的な内容についてのコア・カリキュラムは今後に期待されるところであり、現状では養成機関の裁量に任されているのみである。実習記録についても、学習効果が期待される記録の形式についての報告はほとんどなく、養成機関の集まりや学会などで話題になることもあまりない。

一方学生を受け入れる養護教諭にとっては、実習生との関わりを通じ養護教諭自身が、自分の職務の見直しを行うとともに指導力の向上につながる機会となりうる。養護学との比較で話題にされることの多い看護学においては実習指導は体系化され、指導者講習会なども各地で開催されている。また、看護実習指導者の職場環境や職務経験などの要因が看護職の自己能力の評価に影響を与えていることは既に示されている³⁾。実習指導者の評価的な視点からの研究も多く行われている⁴⁾。しかしなが

ら、養護実習を指導する養護教諭自身が実習によって得る学びや自己評価についての報告は少ない。

そこで本研究では、養護実習の事前から事後にかけて学生と養護教諭が習得した学びの内容を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

対象は、養護実習に参加した大学の養護教諭養成課程に所属する3年生11名と、実習を担当する附属学校の養護教諭4名である。

学生には、実習後に、実習を通じて学んだこと、要望などに関して自由記述による調査を行った。養護教諭には、実習後に、学生ならびに養護教諭自身が学んだこと、大学への要望について自由記述による調査を行った。また、実習内容の54項目について、実習前には指導の可能性を、実習後には指導の達成度を調査した。調査にあたっては対象者に、研究の趣旨を説明し、同意を得たうえで行った。

自由記述の分析にあたっては、記述された内容をなるべく生かす形でコード化し、サブカテゴリー、カテゴリーとして分類した。文中では、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >、代表的なコードを「 」で示した。尚、質的データの真実性と厳密性を確保するために、自由記述の分析にあたっては、研究者2名が別々に行い不一致のものは再確認した。

3. 結果

3.1 養護教諭からみた学生の学び

養護教諭からみた実習を通じての学生の学びは表1に示すとおり、【子ども理解の深まり】では、多面性の発見や集団における特性への気づきなど、より具体的な子どもの姿を見ることができたことを示すコードがみられた。【養護教諭像の具体化】では、養護教諭の職務がより具体的に理解できたことを示すコードがみられた。

表1 養護教諭からみた学生の学び

カテゴリー	コード
子ども理解の深まり	「生徒にはいろいろな面があることの発見」「集団における生徒の特性や生徒の多面性に気づいた」
養護教諭像の具体化	「より現実的で、子どもに寄り添う養護教諭像へと修正した」「自分の言葉で養護教諭の専門性を述べる」

記録を通した学生の学びは表2に示すとおり、【対応の振り返り】では、自分の対応を振り返り、次回に生かすコードが示された。また【記録の深まり】では、客観的記述によって、対象である子どもだけでなく自分自身をも客観的に分析する視点を持たせたことが示されていた。

学生に不足していた知識や技術としては、子どもの発達段階に応じた疾病理解や、救急処置活動と健康相談の進め方についての知識や演習が指摘された。

3.2 学生自身の学び

学生自身の学びとしては表3に示すとおり、【考え方の広がり】【養護実践への活用】【子どもへの対応の変化】のカテゴリーが得られた。【考え方の広がり】では、＜学習意欲の高まり＞＜職業選択の指針＞＜学習と実践のつながり＞＜視野の広がり＞など、机上での学びでは得られない体験を通じて、自分自身の考え方に広がりを持ったことを示すカテゴリーとコードが示されていた。【養護実践への活用】では、＜実践を行う自信＞＜観察力＞が

表2 養護教諭から見た記録による学生の学び

カテゴリー	コード
記録の深まり	「感覚的な表記から、具体的な数字をもとに客観的、俯瞰的に記録できるようになった」
対応のふりかえり	「疑問をまとめ、対応の糸口を発見していた」「大変さや不足点を知り対応に活かす」

表3 学生自身の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
考え方の広がり	学習意欲の高まり	「教員採用試験に向けての勉強にもやる気が出た」「教育系のニュースにアンテナをはるようになったり救急講習（赤十字）に参加したり、実習で知識や勉強の必要性を実感したので学習時間が増えた」
	職業選択の指針	「自分は教師になる人だという気持ちが強まった」
	学習と実践のつながり	「授業で学んだことが学校でどのように実践されているのか、実際に実習を行うことで理解が深まった」「新型インフルエンザの流行時期ということで養護教諭の先生が多くの対応に追われている姿を見て専門家として高い専門性や周囲との円滑な連携が求められているということを実感した」
	視野の広がり	「養護教諭の視点のみで今まで考えることが多かったが、学校の中の保健室であり、養護教諭であることを意識し、広い視野で学校や生徒たちについて考えられるようになった」
	養護教諭のやりがい	「養護教諭のやりがいを感じることができた（生徒がもっとも頼りにしている人が養護教諭であったり、養護教諭として認められているのが他の教員から伝わってきたりしたので）」
養護実践への活用	実践を行う自信	「少しだけ応急処置ができるようになった」
	観察力	「生徒たちのケガについて以前よりも注意して観察するようになった（重症度の判断やアセスメントについて慎重になった）」
子どもへの対応の変化	子どもからの学び	「教えるということを意識しすぎていたが、生徒たちに教えられることがとても多かった」
	話し方	「自分から積極的に話しかけられるようになった」「実習後ですが人と話をするときに「受容」「共感」などの姿勢を意識しながら話すようになった」
	子どもへの対応	「養護教諭の職務を近くで見たり、実際に経験することで知識が深まった。それが自信につながり、自発的に生徒への対応を取ることができるようになった」

得られたことを示すコードがあった。【子どもへの対応の変化】では、子どもから学ぶことや、対応の理解についてのサブカテゴリーとコードが示されていた。

記録物からの学びとしては表4に示すとおり、【記録の方法】において、〈客観的記述への心がけ〉〈具体的記述への心がけ〉〈文章力の向上〉のサブカテゴリーにおいて、記録により自分自身の文章力が向上することが示されていた。【実践への応用】では、〈理解の深まり〉〈実践の評価・振り返り〉〈観察・実践への活用〉〈学習へのつながり〉〈自己の成長〉〈実習生同士の学び〉のサブカテゴリーがあげられた。つまり学生は記録を通じて、学びや自己理解を深めていることが明らかとなった。

一方、学生が考える自分に不足している知識や技術は表5に示すとおり、応急処置やよくある症状への対応方法などが述べられていた。

実習への要望としては表6に示すとおり【実習体制】として、大学と実習先の指導の違いや、体制の整備など、【実習内容】として、実習校による内容の差や統一などの要望が指摘された。

3.3 養護実習による養護教諭自身の学び

表7に示すとおり養護教諭の学びとしては、【子どもの対応の見つめ直し】【養護教諭の職務】のカテゴリーが得られた。【対応の見つめ直し】には、〈記録の充実〉〈対応の自覚化〉のサブカテゴリーがあがり、日頃意識

表4 記録物からの学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
記録の方法	客観的記述への心がけ	「一つ一つの事例や計画について客観的に書くことができるようになった」
	具体的記述への心がけ	「記録をしていく中でだんだん具体的に物事が書けるようになった」
	文章力の向上	「徐々に日誌のことを意識して過ごすようになり早く書けるようになった」
実践への活用	理解の深まり	「書くにつれ、より理解が深まった」「見落としていた事実気づくことができた」
	実践の評価・振り返り	「対応を思い出すことで自分の反省点やよかった点を考えることができた」
	観察・実践への活用	「記録の観点ごとに考えて対応することができた。」「日誌を書くことで日々の流れを記録していくことが少しの変化に気づく手がかりになるのだと気づいた」「対応の根拠を考えたり話し合うきっかけにもなった」
	学習へのつながり	「自分に足りないことを発見することができ、その日帰宅してから調べるなど自主学習をするようになった」
	自己の成長	「初日の記録と最終日あたりの記録を比べると自分の成長を実感することができた」
	実習生同士の学び	「実習生同士でアドバイスし、よいところを取り入れながら記録を書くことができた」

表5 自分に不足している学習事項

カテゴリー	コード
応急処置	「応急処置に関する知識や技術が不足している」「重症な病気や怪我より、もっと身近な症状の対応をできるようにしたほうがいい」「包帯法」
スポーツ外傷	「高校生はスポーツ外傷が特に多かったのもっと深く学習しておきたかった」
疾患の知識	「病気・疾患の知識やそれに対する処置の知識がない」「病気のために生活制限をしなければならぬことについてもっと深く知っておきたかった」「内科的な病気の知識が足りないと感じた。腹痛や頭痛に対して休養させることしかできなかった」
薬品	「薬品に関する知識」
環境	「環境に関することを実習前に学習したかった」
事例	「事例を取り上げ、その対応についての練習をもっと多くすることで慣れておきたかった」
記録	「経過観察の記録のとり方を知っておきたかった」

表6 実習への学生の要望

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
実習体制	大学と実習先の指導の違いによる戸惑い	「記録に関して大学で教わったことと、養護教諭の求める事項に差があり、どの程度まで書けばよいのか分からなかった」「実習校でやるのがばらついていたので統一してほしい」
	大学と実習先の体制	「実習終了と後期授業開始との間の時間が十分に欲しい」「具体的な実習内容を組んでほしい」「初日に何もやる時間がない時間があったので何とかしてほしい」「他の実習校との実習内容や指導に結構差があるように感じた」
	実践の機会	「ボランティア等、救急処置実践の機会をもっと用意してほしい」
	記録物の改善	「記録用紙が書きにくかった。量が多く重複する内容もあった」
実習内容	授業の機会	「養護実習で授業を行える機会は貴重なのでぜひやってみてほしい」
	教材の作成	「掲示物も作成させていただきたい」
	他の学生との交流	「他校でやっていたような他の学科の学生と話し合いをしたい」

表7 養護教諭自身の学び、変化

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
子どもの対応への見つけ直し	記録の充実	「記録の大切さを実感した」
	対応過程の明確化	「日常の問診やいつもと違うと感じる根拠を、言葉にすることで明確化できた」「問題点の再確認と、解決の意欲をもった」「日々の明確な目標の大切さを実感した」「すべての計画は、生徒の実態に基づくことの再認識」
養護教諭の職務	専門性の明確化	「日頃の保健室経営や養護教諭の専門性の体系化、構造化ができた」

せずに行っている対応を改めて意識的に行うことの大切さを実感することを示すコードがみられた。また【養護教諭の職務】では「養護教諭の専門性の明確化」のカテゴリーにおいて「専門性の体系化、構造化ができた」というコードが示された。

養護教諭の実習内容54項目への自己評価については、事前事後で大きな変化はなかった。事前の評価では、これから行う実習にむけての目標や内容を確認しながら実習指導にあたることのできたという意見が共通してみられた。また、反省会の記録からは、事後の評価をすることで実習内容に偏りがなかったか、などについて振り返りができたという意見がみられた。

4. 考察

本結果は、対象とした養成大学が1校であり、対象数も少ないという限界があるため、一般化はできない。そこで本結果は、対象となった大学の3年次の養護実習（基礎）指導の課題に言及されることを踏まえたうえで論を進める。

4.1 実習を通じての学生と養護教諭の学び

臨地実習が学生の志向性に与える影響の大きさについては、約5割の学生が臨地実習によって、養護教諭の志望を強めたり、適正を捉え直したりするという志向の変化があるとの報告もある⁵⁾。本研究を通じて、学生自身の学びの結果で示されたとおり学生は、自己理解を深め、将来の進路選択の指針を得ていることが明らかとなった。

養護実習における学生の自己評価については、児童生徒との関わりや保健だよりの作成などの具体的活動項目が高いことが指摘されている⁶⁾。また養護教諭が行う学生の評価では、学生自身の自己評価より養護教諭のほうが「課題発見の技術と着眼」「個別保健指導」「自覚」「熱意」などにおいて評価が高かったことも報告されている⁶⁾。本研究では、具体的な実習内容を評価する形式をとっていないため、この研究との比較はできないが、学生たちは実習での学びを通じ、自己を振り返り、観察や記録の重要性を学ぶとともに、教育や子どもとの関わりなど広い視点で実習を捉えていたことが分かる。学生は初めての養護実習において、具体的な活動内容に目が向きがちになってしまうため、思考の訓練のための指導

や記録の形式を今後工夫していく必要もあろう。

さらに事後指導は、実習のまとめと、残された大学での学び、養護教諭として学び続ける出発点であるとの指摘もある⁷⁾。事後指導や、実習後の授業において、実習での学生の学びを体系化し、学生が今後の大学での学業や進路選択に実習の成果を結びつけられる指導の工夫も必要となろう。

一方養護教諭にとっては、実習の前後に養護教諭自身が項目を評価することによって、実習の受け入れや振り返りが行えることが示された。さらに実習は、養護教諭の職務について考える機会となっていることも明らかとなった。今後、さらに適切な評価ができるよう項目を精選していく必要がある。本研究の対象は4名の養護教諭であり、自由記述の分析であるため、一般化には限界がある。今後、実習指導にあたった多くの養護教諭を対象とした調査を行うことにより、養護教諭自身の自己成長や、職業アイデンティティを明らかにできる可能性がある。

4. 2 養護実習(基礎)指導の今後の課題

養護教諭が指摘した学生に不足している知識と技術は、疾病理解や、救急処置活動、健康相談活動の進め方についての知識や演習であった。これは、学生自身の学習不足の項目とほぼ一致していた。本結果は、対象となった大学での実習前のカリキュラムや授業内容において、疾病理解や、救急処置活動、健康相談活動の進め方の知識や演習が不足していることを示している。学生は多くの場合、観察・聴取から検診・診断への展開が不確実で、処置・指導も不十分であることは既に指摘されており、そのため、大学での基礎的及び応用的な授業科目を多数開講し、学内実習では反復練習による技術習得にも力点をおく必要が示されている⁸⁾。救急処置等の技術の学習時期と実習時期との対応を考え直す必要も指摘されている⁹⁾。そこで今後、疾病や、応急処置の方法、健康相談活動に関する理論と演習を、3年次の実習前のカリキュラムと授業内容に体系的に組み入れる必要がある。事例によるシミュレーションなど指導の工夫も必要であろう。さらに実習前に補習を行ったり、学生自身が自己学習や演習を行ったりすることによって、疾病や、応急処置の方法、健康相談活動に関する学習不足を補う必要もあることが示された。

実習記録については、実習生が総合実習の各段階で自分の思考過程を細部にわたり記述し、振り返ることができるような総合実習記録用紙の作成が課題であることが指摘されている¹⁰⁾。実習記録用紙は従来の実習で学んだことを留める記録に加えて、学生が保健室来室児への対

応過程を振り返るための記録として有意義であるとの指摘もある¹¹⁾。今回用いた実習記録は、他大学の実習記録を参考として大学教員が作成し、附属の養護教諭と検討を重ねて作成したものである。日誌の内容は日々の日誌に加え、集団の保健指導や、個別の保健指導と健康相談、救急処置の事例、保健室経営など、記録を通じ、学生が実践を理論的に捉えられるような目的をもって作成した。学生の記録に対する評価からは、学生は記録によって、学びや自己理解を深めていたことが示されており、記録の目的は概ね達成できたものと考えられる。一方記録の多さや重複事項などの改善を求める声もあり、今後の改善点も明らかとなった。

学生の要望事項においては、大学と実習先の指導方針にずれがあることや、実習校によって内容が異なっていることが指摘されていた。学生が実習において戸惑わないためにも、養護実習が学生にとってより効果的なものとなるためにも、実習の事前と事後にかけて養成側と実習校の養護教諭とが連携をとり、情報交換を密に行い、指導方針や学習事項を確認していくことの重要性が確認されたともいえる。さらに養成したい養護教諭の像を双方で話し合い、指導者としての統一した方針を明らかにする必要もあろう。

対象となった学生は、開設されたばかりの教室の第1期生であり、大学教員と受け入れる養護教諭双方ともに、初めての経験であった。そのため実習指導の方法や内容については、本結果を元に今後更なる検討を深める必要がある。

5. 結 論

養護実習を通して、受け入れ校の養護教諭は、自己の日頃の対応を見つめ直し、養護教諭の専門性を再認識し、新たな実践への意欲をもつことができていた。学生は、今後の大学生活や進路選択への指針を得ていた。今後は、大学のカリキュラムや教育内容の見直しと、養成側と受け入れ校の教員同士の連携を深める必要性が示された。

付 記

本研究の一部は、第6回日本健康相談活動学会学術集会にて発表した。また、本研究は平成21年度東京学芸大学重点研究費「養護実習における大学と附属学校との連携」(研究代表者：竹鼻ゆかり)の一貫として共同で遂行、執筆された研究成果の一部である。

6. 引用文献

- 1) 齊藤ふくみ, 竹鼻ゆかり, 塩田瑠美: E領域「臨地における実地研究, 養護教諭の資質向上を目指したモデル・コア・カリキュラムの提案 (3), 16-17, 日本教育大学協会全国養護教諭部門研究委員会, 2008
- 2) 竹田由美子, 大谷尚子, 吉田あや子: 相談活動にかかわる養護教諭の力量形成 第7報 養護実習等の機会を活用した養成教育の実態, 日本養護教諭教育学会, 5 (1), 39-49, 2002
- 3) 木村留美子, 南家貴美子 他: 臨床経験や年齢が看護婦の自己評価に及ぼす影響について (I) —自己能力評価から—, 日本看護研究学会雑誌, 25 (1), 69-76, 2002
- 4) 中西睦子: 臨床教育論—体験からことばへ, 9-94, ゆみる出版, 東京, 1993.) (西尾和子: 臨床実習指導者の指導意欲向上と看護管理者の役割, 看護展望, 1 (19), 18-21, 1994
- 5) 高岳雅, 大谷尚子: 学生の養護教諭志向と適性感に関する研究—臨地実習の意義と学生指導のあり方を考える—, 日本養護教諭教育学会誌, 2 (1), 67-77, 1999
- 6) 中桐佐智子, 土井さや, 門田美千代 他: 学生の実習直後の自己評価と指導者評価の検討, *International Nursing Care Research*, 3 (1), 1-10, 2004
- 7) 塩田瑠美, 大谷尚子, 竹田由美子他: 養護実習における事後指導のあり方に関する研究—グループワークを導入した授業の分析から, 日本養護教諭教育学会誌, 18 (1), 57-65, 2005
- 8) 堀内久美子, 福田博美: 養護実習における総合実習の記録を大学での学習に生かす試み, 愛知教育大学養護教育講座研究紀要, 5 (1), 13-20, 2000
- 9) 川崎裕美, 藤本比登美, 保田利恵他: これからの養護実習, 広島大学学部附属学校共同研究機構研究紀要, 35, 279-284, 2007
- 10) 大原榮子, 黒澤宣輝, 崎濱秀行, 垣内シサエ, 伊藤琴恵: 養護実習における総合実習に関する研究—総合実習全体を通しての学生の振り返り及び学生に対する指導養護教諭のコメント分析—, 名古屋学芸大学短期大学部研究紀要, 5, 70-83, 2008
- 11) 石田妙美, 和田節子, 大曾根孝子他: 養護実習における「総合実習」の検討—総合実習記録用紙の活用を通して—, 日本養護教諭教育学会誌, 8 (1), 47-56, 2005